

## 耕論 水俣病の60年

表題は朝日新聞5月27日朝刊。「今月、公式確認から60年を迎えた水俣病の問題は、時を超えて人間や社会に影響を与え続ける公害というものの本質を示している。そこから私たちが学びとったものは。」

水俣病センター相思社常務理事・永野三智さん— 20歳の時、書道の恩師が亡き母親の患者認定と謝罪を求めて裁判で闘っていることを知り、水俣病に向き合うようになりました。理不尽な歴史を前に、チッソ、事件を放置し続けた行政、差別を止めなかった自分の存在に気がつきました。「公害に第三者はない」。公害研究



の第一人者だった故・宇井純さんの言葉です。水俣病事件に無関心を決め込む私たちの未来への選択が問われています。当事者と第三者との断絶を埋めない限り、社会がまた新たな病を生み続けることは自明でしょう。水俣病は、社会の病を映し出しました。水俣病を知ることが、社会を知り、未来を変えることにつながると信じています。

ノンフィクション作家・柳田邦男さん— 日本には教訓を生かさない「悪い文化」がある。先の戦争での作戦失敗の繰り返しはまさにそのためでした。失敗の原因と責任関係を徹底的に明らかにして制度を変えることをしない。無責任国家とも言えます。

「2.5 人称の視点」をもってほしいのです。行政が仕事をする際、被害者や患者の身になって考えることが大切です。冷たい三人称でも感情に走る二人称でもなく、合理性と人間味を兼ね備えた対応こそ新しい時代をひらきます。水俣病で政治や行政、企業が犯した犯罪的な問題は、悪い文化を絶つために語り継ぐべき原点です。過去のものにしてはいけない、現在進行形の問題です。

民衆史研究者、元チッソ第一組合委員長・岡本達明さん— 水俣病の60年は、どの局面をとっても不条理です。不条理の連鎖がどこまでも続く。被害者が前面に出た稀有の公害闘争が水俣病でした。患者が激発した水俣湾岸の3集落の調査を続け、昨年、「水俣病の民衆史」を出版しました。1次産業と工場が支えだったのが、漁業は壊滅、農業は落ち目、工場の雇用は細々。貧しくても助け合ってきた村はなくなった。水俣病のせいで村が潰れたわけじゃない。補償金で潰れたんです。命や健康は返らない。補償金を取るしかない。でも今度はカネで村が破滅する。公害は起こしたらおしまいということ

(2016年6月4日)